

<論文>

自由設計による製作およびその使用経験が 大学生の小物製作の計画力に与える影響

福田典子 信州大学教育学部生活科学教育講座

森下房枝 信州大学大学院教育学研究科家政教育専修

Effect of Experience in Free Design and Use of a Hand-Sewn Small Object on the Planning Ability of College Students

FUKUDA Noriko : Department of Living Science Education, Faculty of Education,
Shinshu University

MORISHITA Fusae : Department of Home Economics Education, Graduate School of
Education, Shinshu University

In order to get some fundamental information on practice of sewing, the effect of experience in free design and use of hand-sewn small objects on the planning ability of college students was investigated using of questionnaires. Questionnaires were given three times, before making, after making and after using, using the same survey method. Emphasis on the functional aspect of the object in planning increased with experience in making and using the object, whereas the emphasis on the aesthetic aspect in planning decreased.

【キーワード】 計画力 大学生 小物製作 自由設計 使用

1. はじめに

家庭科における被服製作は、縫製技術や繊維製品に関する基礎的知識を身につけること、基本的な縫製技能を習得すること、児童生徒自身が自分で工夫して作品を作る喜びや作品を利用する喜びを味わうこと、一つの作品を最後まで集中して作り上げる満足感や達成感を味わうこと、などをねらいとしている。製作のあり方に関しては、縫製によって形作られていく楽しさを味わう(中橋 1998)との位置付けもある。またその教材に関しては、これまで構成・技術・材料・管理等すべての面を含めた要素を持っていたと指摘し、今後の扱いかたが課題である(斎藤 1998)と述べられており、そのあり方に関しては議論が多い。その作品に関しては、実生活での利用度は出来映え・満足感・実用性と関連が深い(高

森 1992) とされる。さらに、被服学習は小中学校において、性役割固定の払拭に対する生涯教育的な立場よりその教育的意義を主張する (Peterat 1998) 場合もある。これまで、製作実習は児童生徒の創造的な表現活動の一つとしても重視されてきたが、近年では、既製服選択能力との関連も指摘されている。これらを統合すると、被服製作は児童生徒自身の様々な活動や家庭における衣生活の豊かな発展に寄与することを期待しているといえる。しかしながら、製作体験の有効性に関する教科教育的な研究例は少ない。小学生を対象としたまつり縫いの技能については、その評価方法 (日景 1996) を開発し、製作経験により技能が向上すると報告 (鳴海 1998) されている。製作前の製作経験が製作途中の作品の縫製技術に対する中学生の評価に及ぼす影響について調べた結果 (山口 1997) によると、製作経験とその縫製レベルの関係は明瞭ではない。被服製作の有効性について正確に検証した報告も十分とはいえない。現在、家庭科教育においては、児童生徒の問題解決力 (水野 2000)、探求力、意思決定力、判断力などの育成がより注目され、それらを意識した新しい指導内容や方法が各領域において模索されている。従来から行われてきた衣生活領域における被服製作に関しても、その今日的な教育意義を明確にし、指導の可能性や新しい指導方法の開発をする必要がある。そこで、本研究では、手縫いによる小物製作について、自由設計による製作とその使用による学習者の計画力向上への影響を明らかにし、被服製作の今日的な教育意義の可能性を見出すことを目的とした。本研究は、児童・生徒が学ぶ家庭科教育衣生活領域における製作実習の改善を目指すものであるが、その基礎研究として、大学生を被験者として検討を試み、若干の知見を得た。

2. 方法

2.1 手続き

(1) 被験者

対象は小学校教員免許取得希望している国立大学教育学部学生 2~4 年次男女 (67 名) であった。小・中・高における製作経験について詳細な事前調査は行っていないが、女子短大生を対象とした調査 (布施谷 2001) によると、中学校で全体の約 3 割がパジャマ製作の経験を有するが、高校では製作経験の少ないことが報告され、本対象においても製作経験は同程度と予想される。学校教育における経験に対する性差の影響については、高等学校において男女共修が進み、家庭科が必修になっていることから、ほとんど少ないものと予想される。

(2) 実施の流れ

実習のし易さを考慮し、A グループ (45 名) を 2000 年 7 月中旬に、B グループ (22 名) を 11 月中旬に 2 グループに分けて行った。いずれの場合においても、製作実習前に衣生活に関する講義として、①衣服の着方 (90 分) ②衣服の手入れ (90 分) ③縫製の基礎 (90 分) を履修済みであった。縫製の基礎では、縫製の特徴・基本プロセス・手縫いの基礎・

主な材料・用具について履修した。設計および製作に各々90分ずつの個人活動時間を設定した。設計時に被験者は、収納対象物・採寸用具・方眼用紙（1mm）を用いた。作品の難易度や技能レベルに差があったため、製作所要時間は約1～5時間の幅があり、不足分は各自の自宅で行った。製作後約2週間の使用期間を設定した。

(3) 設計時における被験者に対する具体的指示内容

設計にあたり、以下の二点を指示した。一点めは、小物のうち収納を目的として、かつ製作者自身の高い使用頻度が期待できる品目であることとした。一般に小物とは手に載る程度の大きさの製作品とされ、①装飾目的のワッペンやマスコットおよび②収納目的の小銭入れやペン入れが知られる。本実験では、小物の装飾性よりも機能性への学習効果を明らかにするために収納に限定した。二点めは、手縫いによる縫製であり、なみ縫い・返し縫い・かがり縫いの3種類の縫い方とボタンつけを取り入れることとした。

目的収納物の採寸を行うことのみについて助言を与え、対象物の寸法に対してどの位のゆとり量や縫い代量を取るかは各被験者が各部位ごとに決定し、特に指示は与えなかった。材料についても、裁ち目処理の必要なものと不要なものについての特徴のみを伝え、各被験者が自由に選定し、その他の指示は与えなかった。方法や手順についても、特に指示は与えなかった。

2.2 分析方法

(1) 製作品および製作・使用記録

製作品は使用期間終了後、1点づつその品目を確認した。製作使用記録から、製作経過や使用経過を総合的に把握した。

(2) 製作者意識

質問紙法により、製作前、製作後、使用后計3回同一の調査票を用いて製作者意識の変化を調査した。調査内容は①作品の製作計画において重視する観点②作品の縫製技術評価において重視する観点とした。製作計画については、材料選定・設計・方法手順の選定の各段階における幾つかの観点について、その重視度を、大変重視する（4点）重視する（3点）やや重視する（2点）あまり重視しない（1点）の4段階択一式で回答を得た。

3. 結果および考察

3.1 作品の製作計画において重視する観点への影響

(1) 材料選定について

図1に示すように、作品の製作・使用により、「製作者好みの色柄」の重視度が低下し、「使用目的や耐久性」の重視度が高くなる傾向が認められた。一方、「材料のデザインとの適合性」の重視度は、製作・使用の影響を受けにくい傾向が認められた。作品の製作・使

用により、材料計画において、色柄などの審美性よりも耐久性などの機能性を重視した選択をする傾向が強まった。これは、収納を目的とした小物の場合、機能性の方が審美性に比べてその優先順位が高く、より本質的な性質であることを製作者自身が製作・使用の経験の中から獲得したためと考えられる。特に製作経験に比べ、使用経験の影響が著しい結果となったのは、製作場面よりも手作りの作品を自分自身が使用する場面において材料の機能上の問題点に気づく場合が多いためと推察される。

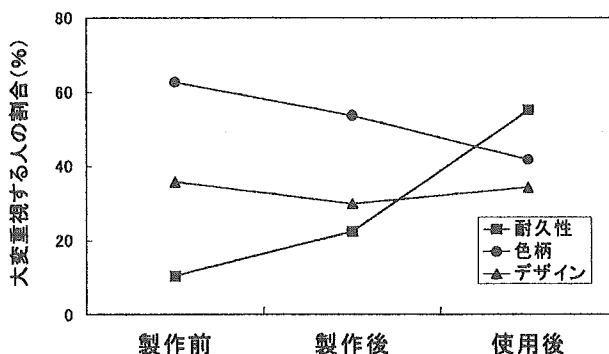


図1 材料選定時重視する観点

(2)設計について

図2に示すように、作品の製作・使用により、「材料と縫製方法に適した縫い代量」の重視度が著しく高まる傾向が認められた。また、作品の製作により、「材料と使用に適したゆとり量」の重視度が高まる傾向が認められた。一方、「形状のバランス」の重視度は、製作・使用の影響を受けにくい傾向が認められた。作品の製作経験により、ゆとり量への意識が高まったのは、設計の際に部位ごとの適切なゆとり量に注目し、製作者自身が決定する過程を経験し、適切なゆとり量の重要性を理解したものと推察される。作品の製作・使用により、縫い代量への意識が高まったのは、縫合の際に縫い代量不足のため、縫製しにくい場合や、使用の際に縫い代量不足のためにほつれが生じた場合や、縫い代量過多のために使用しにくいことを実感した場合いずれの場合においても、適切な縫い代量の重要性を理解したためと推察される。

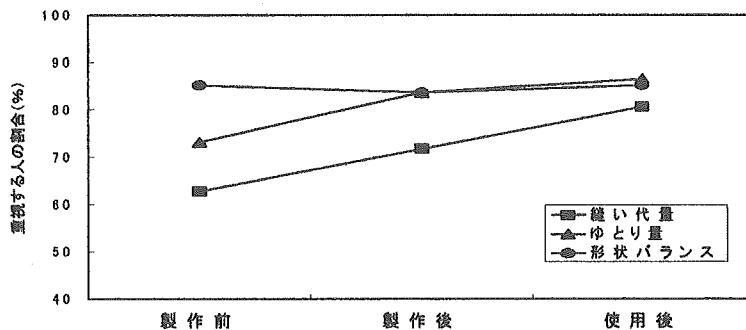


図2 設計時重視する観点

(3)方法や手順の選定について

作品の使用により、「使用目的に適した縫製方法および手順」の重視度が高まる傾向が認められた。これは、前述と同様に、収納を目的とした小物の、全体の強度や対象品の出し入れ部開閉し易さやその安定性が有用性に大きく影響するために、使用により、縫製方法および手順の意味を理解し、重要性が確認されたためと推察される。

3.2 作品の縫製評価において重視する観点への影響

図3に製作前後および使用後、各観点について、重視する人の割合を示した。明らかに、縫製技術評価において重視する観点のいずれの項目も製作後、重視度が製作前に比べていったん小となるが、使用により再び増大し、重視度は製作前に比べて大となる傾向が認められた。縫合部寸法の正確さ・縫合部の美しさ・縫合部強度の3つの観点を比較すると、製作前、製作後、使用後のいずれの段階においても、縫合部強度に対して重視度が高かった。作品の縫製技術評価について製作直後、要求度が低下するのは、製作を体験することにより、その難しさを実感し、品質評価が甘くなるためと推察される。しかし、利用によ

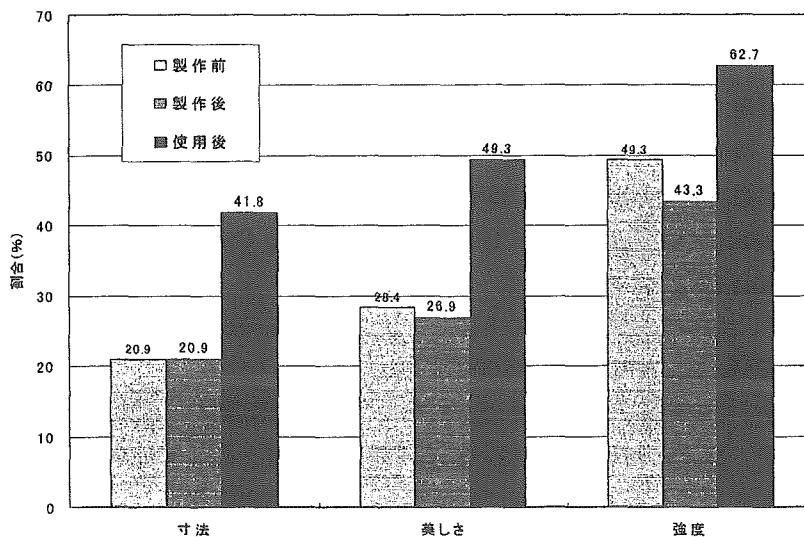


図3 縫合部品質評価において重視する観点

り、いずれの項目も再びその必要性を確認し、品質評価における縫製レベルに対する注目度の高まりとともに、その認識が高くなるものと推察される。

4. 結論

手縫いによる小物製作について、自由設計による製作とその使用により、大学生の製作計画力の向上が認められた。特に、作品の製作・使用により、材料選定に関しては、色柄などの審美性よりも耐久性などの機能性を重視した選択をする傾向が明らかとなった。設計に関しては、作品の製作・使用により、材料と縫製方法に適した縫い代量の重視度が著

しく高まる傾向が明らかとなった。これらの製作計画力の向上は、繊維製品購入の際の主體的で適切な意思決定や繊維製品の修繕やリフォームの実践へ発展可能な力の基盤となるものと考えられる。今後は、縫製レベルの品質評価能力への製作経験の有効性についての検討や製作経験と使用経験を独立したものとして捉え、それらの教育的効果について一層詳細な検討が必要であろう。本研究では、大学生を対象としているために、そのまま児童・生徒に同一の結果をあてはめるには不十分である。しかしながら、大学生に比べて色柄などのデザインへの関心度が著しく高く、見えない部分への認識度が著しく低い児童・生徒においては、発達段階に応じた効果的な自由設計の範囲を設定すれば、大学生に比べて一層大きな教育効果が期待できる。また、そこで、獲得された繊維製品に対する多角的な見方は、大学生よりも一層素直に受け止められ、児童生徒の生活に生かされるものと推察される。しかし、児童・生徒を対象に製作・使用による意識や着眼点の変化を詳細に測定するには、実験方法等に様々な工夫が必要である。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました信州大学学生の皆様に感謝の意を表します。

参考および引用文献

- ・ 日景弥生, 鳴海多恵子「まつり縫い技能の評価と指導 (第1報) まつり縫いの数量的評価」日本家庭科教育学会誌, 第39巻, 第3号, p 29-33 (1996年)
- ・ Linda Peterat, *It Comes From Our Souls-Creating Curriculum Spaces for Textiles and Clothing Studies-*, (1998)
- ・ 水野香代子「主体的な学習を進める教材の工夫と開発・家庭科の教材の基本的な考え方」初等教育資料, No.728, p. 2 (2000年)
- ・ 中橋美智子「これからの被服一身近な材料でできる被服実験一」教育図書 p.13 (1998年)
- ・ 鳴海多恵子, 日景弥生「まつり縫い技能の評価と指導 (第2報) まつり縫いの形状と学習経験」東京学芸大学紀要第6部門, 50巻, p 37-42 (1998年)
- ・ 布施谷節子, 高部啓子「家政系女子短大生における手縫いの技能の実態-被服製作の知識と過去の経験との関連性-」日本家庭科教育学会誌, 第43巻, 第4号, p 273-278 (2001年)
- ・ 斎藤祥子「被服デザインを中心とした衣生活の指導」教育図書 p.10 (1998年)
- ・ 高森寿「家庭科における被服製作の実態と製作品の利用に及ぼす要因」熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 41号, p 101-111 (1992年)
- ・ 山口好美, 仙波圭子, 小澤紀美子「中学校被服製作における指導法に関する研究一製作段階別評価を中心として一」東京学芸大学紀要第6部門, 49巻, p 39-44 (1997年)

(2001年3月31日 受付)

(2001年7月19日 受理)